

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第四十六回）

ゆはらのおほきみ

「湯原王（鳴く鹿）」

あきはぎ

ち

まが

秋萩の散りの乱ひに 呼び立てて

な

はる

鳴くなる鹿の 声の遙けさ

作者 湯原王 卷八一―一五五〇

（解説）秋萩の散りかう中に紛れて、妻を呼び立てて鳴く  
牡鹿の声のはるばると聞こえることよ。

○秋が深まる頃、牡鹿は妻を恋しがつて甲高い鳴き声をあげる。せつないその声は、季節のもの悲しさとあいまって作者の心を揺さぶったであろう。

「秋萩」秋の七草の一つ。山野に広くはえる落葉木、秋には多数の紅紫色で蝶形の花をつける。万葉集で最も多く詠まれた花。

「散りの乱（まが）ひに」は散り乱れている場所の意。

「呼び立てて」は牡鹿が妻を呼び立てて誘っている意。

「鳴くなる鹿の」は鳴いている鹿の意。

○題詞は「湯原王の鳴鹿しかの歌一首」である。

○作者・湯原王は奈良時代中期の皇族・歌人であった。  
天智天皇てんじてんのうの御孫で万葉歌人・志貴皇子しきのみこの御子。

(参考文献)日本古典文学大系「萬葉集」、牧野富太郎著「牧野日本植

物図鑑」等

(写生地) 奈良公園「春日野・飛火野」から三笠山一帯を  
描いていると鹿の鳴き声が森の中から聞こえてきた。

(池田杏花)

